

[論 文]

究極の『エマ』解釈? ——漱石『それから』

An ultimate interpretation of *EMMA* —— *AND THEN* of Soseki Natsume
—— Why Emma is allowed to be the heroine beloved by the Author ? ——

上 野 正 二

Ueno Shoji

はじめに

ジェイン・オースティンを読み始めて五年が経った。最初に『プライドと偏見』を読んで以来、『分別と多感』『エマ』『マンズフィールド・パーク』『ノーサンガー・アベイ』『説得』と読んだのだが、文章の活きという点での面白さで『プライドと偏見』『ノーサンガー・アベイ』、文学として見るに『説得』と『プライドと偏見』の重要性は理解できた積もりであったが、『エマ』という作品は何がいいのか、分からないままであった。ところが、この作品がイギリスではオースティンの最高の傑作だとされているし、「世界の大思想シリーズ」であるブリタニカ社のGREAT BOOKSにまで収録されている。その理由はなんであるのか。二年間取り組んでみて、筆者には漸く一つの結論が得られたと思う。その筆者の『エマ』解釈に最も大きな影響を与えたのは、漱石の『それから』なのである。

ところが、オースティンと漱石の関係といえば、この稿を終わるに当たってもこれまで外から得られた情報によると、漱石の「則天去私」がオースティンの『プライドと偏見』とゴールドスミスの『ウェイクフィールドの牧師』から着想されたとか、漱石は『虞美人草』の時代はメレディス的な文章を書いていたのがオースティン風のシンプルな文章になった(文体論)だの、トルストイやドストエフスキーには作家としての「私」が残っているが、オースティンにはそれがない(作家の姿勢)だのといったことばかり論じられていて^①、肝心の「漱石思想」が如何なる処から成り立っているのか、何に由来しているのかに関しては、(筆者の管見のせいであれば幸いである)オースティンの名は何処にも出てこないのである。これでは作家夏目漱石は世界文学の中では突然変異であったとせねばならないことになるであろう^②。

他方、オースティンに関してはどうであろうか。『エマ』に関してだけでなく、既に触れたように^③、筆者が渉猟した文献では、他の作品に関してもその基本的な理解において、少なくとも我が国においては、同意出来るものがない。漱石が単に文章の自然な流れという点においてのみ称讃してその思想に触れなかったのは、彼の計略、それも極めて巧みな計略であったとして、この国の英文学界がオースティン文学の何であるか、オースティンの誰であるかについて正鵠を射ることが出来ないのは、今日のオースティンブーム

がいかに商業主義に踊らされているとはいえ、読書界として惜しむべき事であると思う。

第一節 『エマ』の論点

先ず、オースティンからはじめよう。じっさい、多くのオースティン研究者が、彼女の最高傑作は『エマ』であると指摘しながらその何処が傑作であるのかを語らない。

イ、岩波文庫『エマ』の訳者、工藤政司氏はその「解説」において「この作品は、虚飾のない計算尽くされた文体できわめて非妥協的な女性のウィットと、自信に満ちた道徳観を大胆に描いているために——まさしくその大胆さによって——一部の読者の反感と批判を買ってきた」(p.377)と述べ、シャーロット・ブロンテとヘンリー・ニューマンの名を挙げている。ただしニューマンはこの作品に敬虔の念がないと怒りながら、他方で「エマに好意的になる」とも言っているのだという。彼はまた『エマ』は難しい小説であると書きながら、「しかしどこに難しさがあるのかわからない——」(p.383)と他人の文章に語らせている。結局自分の目では何にも読んでいないことになろう。

ロ、ただし、彼は「道徳観」について取り上げているだけまだましな方であり、中公文庫『エマ』の訳者、安倍知二氏、ちくま文庫『エマ』の訳者、中野康司氏、Everyman's Library IntroductionのMarilyn Butler氏になると、そんなことにはまるで無頓着である。

ハ、大島一彦氏の『ジェイン・オースティン』によると、この作品はオースティンの作品の中でとりわけ彼女の中庸の精神が現れるものであり、「燻銀のような渋みと落ち着きを湛えた喜劇的世界となっている」と言い^④、『マンスフィールド・パーク』のような悪徳を罰せられる結末ではなく、自己反省によって許され、愛される娘を描くという難しい仕事を仕遂げたものだ、と言っているのである。

このような大筋を予め立てて見れば、エマが戯れともいえる男女の取り持ちをした挙げ句に勘違いをしてハリエットがナイトリーを慕っているのを、フランクを慕っているものと思い込んでおり、その間違いに気付いたところで、ナイトリーは自分のものでなければならぬという思いに刺し貫かれて以来断固ナイトリーとハリエットの結びつきを拒否する(250-62)のも、エマの自己嫌悪(247)と事態の成り行きにより「エマ苦境を脱出する」(248)で片づいてしまう。

ニ、あるいはまた、『オースティン文学の妙味』を書いた宮崎孝一氏は、エマのナイトリーへの執着はテキストを引いて指し示すものの、エマ自身の〈道徳性〉といったものには少しの顧慮も払わずに通り過ぎしている^⑤。これでは折角示そうとした「妙味」もへったくれないだろうと思うが、どうだろうか。

いずれにしても、このような論者のように『エマ』を喜劇的作品と取ることができるのは、舶来論文の傾向をいち早く嗅ぎ取り、さらに自分勝手な思いこみによって作品を切り取り、レッテル張りをして済ませるという結構な手法が通用するからであろう。文学鑑賞の基本を学び直さなければならないだろう。

さて、では『エマ』は「自信に満ちた道徳観を大胆に描いて」いるだろうか？ そのために「ニューマンは、ジェーン・オースティンには敬虔の念がないとって怒り」「オースティンの非宗教性に批判的だった」と言われるが^⑥エマはそうのように描かれているのだろうか？ 『エマ』がオースティンの作品中で作家自身に「自分以外には誰もあまり好きにな

れそうにないヒロイン」を描こうとした作品とされていた点^⑦に関して、その肝心の人受けしない理由は何であったのだろうか？作家自身はどういう点でこの人受けしないヒロインを救済しているのであろうか？このような点が明白にならない限りは、この作品がオースティンの主要作品だという宣伝文句は虚しいだろう。

1) 筆者の解する『エマ』の構造

少々長くなりすぎるし、その割には粗雑に終わるおそれがあるが、肝心な点であるから（とはいえ、インターネット検索「Google」で得られる幾つかを対比すると面白いのだが、その余裕はない）いま手元にある講義に使用するために問題を拾い出しながら作製した筆者のシュノプシスを示させて貰うことにしたい。

『エマ』シュノプシス

（ ）内の数字は、岩波文庫の頁を示す

1、ハイペリーのハートフィールドの主人公エマ・ウッドハウスは、近隣に並ぶもののない家の娘、美しく聡明、朗らかな性格の21歳の女だが、問題を抱えている。だが、ここで作家の述べた言葉を引いて、「エマは作家自身以外には誰も好きにならないような女だ」、などと言ってはならぬ。この小説は彼女の一年間の「成長記録」なのであるから。多くの研究家がオースティンの作品では『エマ』が最高だというのだが、理由は不明である。主人公のエマは素質は善いが此处では愚か。芯が真っ直ぐであることにより、恋の相手が優れている場合には全部が善くなる例となっている。『プライドと偏見』のエリザベス同様に。彼女は、ナイトリーの忠告に初め鈍感であるが、次第に耳を傾けるようになり、大反省をするのだが、その足元で没義道な選択をするように思われる。

ミス・テイラーという姉のように付き合った家庭教師がウエストン氏（彼は42章などで愚さを露呈する）と結婚して近所に移って行った。姉イザベラが七年前にジェイムズ・ナイトリーに嫁して以来エマは父親の家を宰領してきており、その経験から自分の思いが何でも通ると思い込んでいる。ジェイムズの兄、ジョージ・ナイトリーは、37-8歳の物分りのよい男。いつもウッドハウスの家に入出入りして、エマには辛口の批評が出来る唯一の人（14）エマの欠点分かる。ミス・テイラーが去ったのは、エマにとってよいことだと思っている。エマがウエストン夫妻の取り持ちに「成功した」と思って自分のそういう才覚に自信を深める点についても、一言評言あり（17）。しかし、エマには通用せず。

2、ランドールズの住人ウエストン氏の身上。先妻とは不似合いの結婚（チャーチル家が名門で、ウエストンは二、三代前の成り上がり）、息子フランクは、ヨークシャー州エンスコムのチャーチル家に養われている。

3、エルトン氏は、エマが次に妻君を世話しようと目論んでいるハイペリー教区の牧師。独身でセンスが良いと思われるが、後に馬脚を表す。ほかに、ベイツ母娘、ミセス・ゴダード（寄宿学校の教師）など。彼らに囲まれて日を過ごすことにエマは恐れを感じている（31）。愚かな娘でも、虚無感に囚われて時としては人生の無駄遣いをしているのではないか、と思うのだ。そこにゴダードの生徒として、ハリエット・スミスが現れる。エマは自分に立ち返る踏切版となるこの折角の虚無意識を紛らせるために、愚かにも彼女を支配しようとする。

4、ハリエットも賢くはない（37）が、尊敬する人物からなら誰からでも導かれたいと

願っている（同）。ハリエットはゴダードの元に来る前に、ナイトリー所有の僧院水車場農園のマーチン家に二ヶ月留まり幸福な時を過ごした。マーチンは独身24歳（43）。ハリエットは彼に好意を抱いている（40）が愛の徴候はない（45）。マーチンは読書家らしい（41）。ゴールドスミス『ウェイクフィールドの牧師』など。この作家の名がもう一度（下217）登場するのは、重要な作品解釈上の意味を持つだろう。これ、漱石が『プライドと偏見』と共に「則天去私」着想の源泉と認めた作品。エマの階級意識（42,47）。エルトンは感じのいい男だが、エマを財産目当てで狙っていることはエマには分からない（50～）。

5、ナイトリーとウエストン夫人の対話。

ナイトリーはエマとハリエットが親しすぎるのがいけぬと言う。ハリエットはエマにとって悪い友。その理由は、エマは自分のことを何でも知っているとっており、ハリエットは自分のことを何も知らずにあらゆる面で無意識でベンチャラを使う。これがエマに、まだ自分が学ぶことがあると想像するのを妨げる（56）。

ナイトリー曰く「私は恋をするエマを見たい。恋は彼女にいい経験になる」（61）。

ミセス・ウェストンは、エマが結婚しなくてもいい、と言う。彼女も愚なのだ。

恋の飛翔力について分かる人と分からぬ人のちがい。

6、エルトン牧師。エマは彼がハリエットに気があると思う（64）。ハリエットの肖像を描くエマに、エルトンは走り使いをする（74）。

7、マーチンからハリエットに求婚の手紙（75）どうすべきかをエマに訊ねるハリエット。エマは指図をするのではないと言いつつ、求婚を断るよう導く。マーチンは無教養、エルトンの方が階級、振る舞いがいいと評価して、返信に手を入れるエマ（84）。

8、ナイトリーは、その前に求愛が相応しいかどうかをマーチンに相談されており、二人が似合いであると判断（91-）。エマとナイトリーの口論。面白い。女性解放問題の先駆け？

ハリエットとマーチン（90-102）。ハリエットとエルトン（102～）。

エマの自問「利害関係を乗り越える情熱の力をナイトリーは知らない。情熱は合理的思慮分別を乗り越えさせる」（104）。〈情熱〉は大事だが、エマには先ず乗り越えるべき思慮分別が元から備わっていない。ハリエットの誤情報：エルトンのロンドン行きの件。

9、エルトンの求愛。シャレード。ただし実は、ハリエット宛てではなくエマ宛。エマはハリエットに彼女宛のものだと渡す。

10、エマ、ハリエットと共にエルトン家の方へ散歩。

エマの結婚観（133-）。恋に陥ればどうなるか分からぬが、十分な資産があれば結婚せずとも笑い者にはならぬ（135）。エマ、貧農に施しをして帰るところ、エルトンに会い、ハリエットと彼を歩かせる（140）エルトン邸に寄る。

11、ジョン、イザベラ夫妻の来訪、彼らの性格（145）。

12、ナイトリーの参加。エマが招待。先の口論の後始末。彼は治安判事（156）。

ジェイン・フェアファックスが話題になる。エマと同年齢（162-3）。

13、ランドールズの夕会。ウッドハウス一家、ナイトリー、ハリエット、エルトン。ハリエットの風邪にエマ付きそう。エルトン来る（169）。ハリエットの元に留まらず、喜んでランドールズに行く。エマの不審（172）。ジョン、エマにエルトンの「大きな善意」のあることを指摘（174）。ウエストン家に入る前のエルトンのハシャギ様とジョンの不平

- (179-80)。
- 14、エルトンの接近がエマに不快(183) フランクの浮上。エマのフランク観：もし結婚するなら彼こそが相応しいと一切ならず考えた(184)。
フランク来訪のこと。それにつきまとう疑惑(186)。偉い夫人。ミセス・チャーチルのこと。
- 15、エルトンのいよいよおかしい態度。帰りの騒動(195) エルトンと差し向かいで馬車に乗るエマ(200)に求愛。ハリエットは身分違いだというエルトン(205)。
- 16、エマの反省。ナイトリーの判断の正しかったことを思い赤面。エルトンの傲慢(209)。彼には本当の愛はなく、エマがダメなら別の物持ちの娘を狙うだろう——というエマのプライド(210)。「単純なことに策を弄しすぎた」(212)。
- 17、エルトンのウッドハウス老人あて手紙、「旅行に出て不在する」。エマを無視し怒りを示している。ハリエットへの説明(218)。
- 18、エマとナイトリーのフランク評。ナイトリーはフランクが義務を怠っているという。「義務は男がやろうと思えば必ずできる一つのこと」(225)。この作品では「義務」はキーワードの一つ。オースティンの倫理観についてはファニー・ナイト宛て「書翰」109など参照。
- 19、ベイツ母娘訪問。孫娘ジェインの手紙の噂話。
- 20、ジェインの身の上。とくにキャンベル大佐の保護を受ける。このジェインが来るらしい。エマの不快。ナイトリーの解釈(251)。
ジェインの優雅さを見てのエマの決心(253)。しかし再度元に戻る。ジェインら一家でハートフィールドを訪ねてくる。ジェインとフランクが知りあいたいこと(256)。まともに答えぬジェインにエマ怒る。
- 21、先のジェインらの訪問に同席したナイトリーの感想(256-)。
エルトンの結婚(262) ミセス・コールからのベイツ宛手紙で知る。ナイトリーは別口でコールから直接きく。相手はミス・ホーキンス。P・Pのコリンズの役割といえよう(270)。ハリエット、マーチンに会う。
- 22、ホーキンス嬢の噂。ハリエットのマーチン訪問(283)。エマも一枚加わる。
- 23、帰途ランドールズを訪ねる。フランクの来訪の報、ハートフィールドに父子で来訪。フランク、ジェインを訪問(297)
- 24、フランク、義母と来訪、ジェインをめぐってのフランクとエマの評価(302-)。エマ、フランクを高く評価(312)。
- 25、エマ、少しフランクを冷ややかに見る。フランクのロンドン行き——真の目的は？ナイトリーは一人エマに厳しい人(316)。
コール家(近所づきあいが悪かったが、近頃商売で当てて家を大きくし交際を上げた)の夜会(316)。エマらは招かれぬと思っていたら招待状くる。
- 26、パーティーにて(326)。ベイツ家にピアノがあった、送り手は誰か？(328)
ナイトリーとジェイン。ナイトリーの親切、ベイツの三人を送るために馬車を用意する(342)。ウエストン夫人の勘ぐり。ナイトリーとジェイン(343)。エマはナイトリーが身分を貶める親戚を持つことになるというのに対して、ウエストン夫人は、ナイトリーは承知の上で望むのだという(346-7)。すると、P・Pのダーシーがエリザベスを選ぶのはそ

う特別の例ではないことになる。エマはキャサリン・ダバーク役。

27、翌日、ハリエット来。買い物に出る。ウエストン夫人がベイツ家に行くのに会い (360)、またベイツに会い、エマも同行する。

28、フランク、先客として作業中。ナイトリー通りかかる (377)。

29、別のダンスパーティー。フランク、エマにダンスを二曲申し込む (父親の囁きは何？ 397)。

30、フランク、チャーチル夫人の病気のためパーティーの前に呼び戻される。エマは大きな損失と思う (14)。彼が自分を愛していると思う。自分も恋をしていると思う (15)。

31、想像の世界での恋——いつもエマが拒否して終わる。エルトンの話題、復活。愛情深いことが大事で、自分にはそれが欠けているというエマ (24)。

32、エルトン家訪問。夫人は財産持ちで、家庭が欲しかったのだと思うエマ (28)。エルトン夫妻の返訪。夫人は虚栄心が強く、人の上に立ちたがる女だ、とエマ (29)。どういふ訳か怒らないエマ (35)。ナイトリーを呼び捨てにするのに我慢できぬエマ (40)。

33、エマは特にエルトン夫人の悪評はしない。が夫人は感情が変わる (44)。エマが音楽クラブの案に冷ややかなため。エルトン夫人のジェインへの好意 (45)。ナイトリーの参加 (52)。

34、エマのエルトン夫妻招待。ジェインへの気持ちを改めるエマ (61)。郵便を自分で取りに行くことに固執するジェイン。

35、続き。

36、ウエストン夫人の参加。フランクからの手紙で彼がやがて来ること。

37、エマ、フランクが自分に気があると独り相撲。フランクが再来 (99) してみると、そうではなかった。

38、クラウン館ダンスパーティー。エルトンのハリエットへの仕打ち (118)。ナイトリーの配慮、ハリエットが踊りにあぶれているのに相手する (120)。ナイトリーとエマの会話 (123)。「あなたを非難することはよすよ。あなた自身の反省にまかせる。——任せるのは虚栄心の強い心にじゃない。真面目な心にだよ。片方が間違ったらもう一方が正してくれるさ」。この辺りからエマの目覚め。ハリエットとエルトン夫人の比較。ナイトリーとエマのダンス (126)。

39、ハリエット、乞食集団に襲われ、フランクに助けられる。

40、ハリエットの決意。決して結婚しない (140)？エマの誤解。諦めないようにと励ましつつ「相手が自分を好いていることがはっきりするまでは決して相手を好きにならぬこと」 (143)。ハリエットの宝物：絆創膏の切れ端とちびた鉛筆。これはナイトリーに関わるもののなのに、エマはフランクのものと勘違い。

41、ナイトリーの洞察。フランクはエマを秤に掛けているのではないか。「エマが彼をハリエットに譲ろうとしているとき (第二節註⑫を参照)、ナイトリーはフランクがジェインを弄んでいるのではないかと疑い始める」 (145)。

フランク、ペリー氏の馬車新調の話を書いたと言い、彼女が否定する (147-)。ミス・ベイツはペリー夫人からこの話を聞いたと言い出す (149)。つまりは、ジェインがフランクに書いたということか。ナイトリーはこのフランクの態度

がエマを危険にするものと見なし、彼女を助けるのを**義務duty**と感ずる (155-6)。エマ、気付かず。

42、エルトン、夫人の兄らが来る来ると言う、が来ず。したがって招待会なし。ナイトリーがピクニック会を企画。自邸ドンウエルの蓐狩り (162)。ナイトリーの正気 (163)。フランクが遅く到着の予定なるも現れず、ジェインがエマと会い、逃げるように一人で帰る (175)。フランク現れる (178)。

43、ボックスヒル行き。何かが欠如した感じ、一体感。間の抜けたフランク (184)。ぼんやりしているのは何故か? やがてエマに向けて陽気になりいちゃつく (185)。「昨日の三時」が何か意味あるらしい。フランク、エマに妻を選んでくれと言いつつ (194)。

ナイトリーのエマへの苦言 (196)、ミス・ベイツへのエマの仕打ち (189) に対して。エマ、感極まる (198)。来し方全般とは言えないが、生き方への反省。生涯で最高の打撃 (most forcibly struck in her life)。これほどにエマに人間の義務意識が呼び覚まされたことは、注目せねばならぬ。

44、不快な一夜を過ごして、エマはミス・ベイツに謝るべく訪れる。エマの良心 (200)。ジェインを隠すベイツ。なにやら勤めに出るのが決まりながら動揺している如し。

45、留守の間にナイトリーとハリエットが来ており、ナイトリーはロンドンに発つという。その理由は、49章でのナイトリーの言辞の変化から、フランクとエマの仲への嫉妬 (287) 以外にはない。

エマのベイツ訪問を知り、ナイトリー、妙に感動を表現する (214-16)。ミセス・ベイツに、それからこの後ジェーンにも、全く態度を改めるエマ。

チャーチル夫人の死報 (217)。エマのジェインに何かしてやろうという気持ち (220)。ジェインは病気。招待は二度とも断られる。訪ねても容れられず (222)。

46、ウェストン夫人が是非来てくれという (225)。夫人の慌てようは、フランクとジェインの婚約していたこと (229) が明らかになり、フランクとエマの関係を誤解していたため。今は好きでもないエマだが怒る (232)。①自分を取り合わなかったが、フランクは人前でずっと自分に言い寄った。②ジェインへの不誠実。その前に、ジェインとハリエットへの同情 (231)。

47、エマ、ハリエットへの介入を反省する。ハリエットに対する**高級義務 (superior duty)** (243)。だがハリエットは既に情報を得ていながら動揺なし (244)。ハリエットは、自分の意中の人はナイトリーだという (247)。これを聞いて、エマはナイトリーの存在意義、彼への恋を自覚する。「ナイトリーは自分以外の誰とも結婚してはならない!」 (250)。今度はナイトリーがハリエットと結びつく心配。ナイトリーのハリエット評に確かに変化があったこと (252)。ハリエットの証明 (249-251)。

エマ、自分が自分を騙している、いた、ということに気付く。「今日が惨めさの始まり」 (256)。フランクが現れて以来、エマはいつも彼とナイトリーを比べ、ナイトリーの方を優れていると評価した、つまりフランクを一度も愛したことはなかったことに気付く。自分の耐え難い虚栄心 (257)。ハリエットとナイトリーが結びつく可能性 (258) ——〈第二次原因〉?

48、エマの愛の目覚め。ハリエットへの責任感。しかもナイトリーには独身でいてもらわ

ねばならないと思う。なお自分に囚われるエマ。「私は結婚しない積もりだ」と言いつつ (262)、ハリエットを遠ざける (262-3)。

ウェストン夫人の報告 (263)。エマの憂い (melancholy) (269-72) と新しい決意 (resolution)。よい行い (better conduct)、自己認識の希望——？しかし、こんなものは吹き飛ぶ。

49、ナイトリーの告白とそれを受け入れるエマ。これでは面白くないだろう。高級倫理感に目覚めたエマならば、此处でもナイトリーをハリエットに譲らねばならないのでは？ (cf. 145)。じつに、ここにたしかにこの作品のクライマックスがある。仲人をしゃしゃり出たエマ、控えたエマ、いずれもそのツケとして彼女の上にハリエットの処遇が重くのしかかる。そこに当に彼女への背信行為としての帰結が待っているのだ。ハリエットが思いを懸けてもよいと言われた (エマの勘違いがあって) ナイトリーとの間に、自分が居座るのだ。**英雄的であることに最も遠いエマの選択**。筋は別だが、「この場合のように行動は間違っているが感情的には正しいときには矛盾は大した問題ではないのかもしれない」 (285)。

50、残る二つの問題。①父親——彼の生前は婚約に留める。

②ハリエット——イザベラの元にやる。

ウェストン夫人から回ってきたフランクの夫人宛手紙 (292-304)。伯母の元にあっては彼らが結婚できなかった事情は分かる。エルトン夫人の勧めた家庭教師をジェインが引き受けることにした理由は、フランクへの怒り (301)。

51、エマ、手紙を評価する。ナイトリーのウッドハウス老人問題の解法——自分がハートフィールドに移ること (313)。

52、ハリエットは相変わらず会わず。マーチン、ロンドンへ行く。エマ、ジェインを訪ね仲直り (318) エルトン夫人が来ている。

53、W夫人出産。ナイトリー、子供の誕生にかこつけて、エマの成長を「甘やかされて育った子がだんだん気にならなくなった」 (334)。13歳から思いを寄せてきた (335)。

ウッドハウス老人の同意をとりつける (341-44)。ウェストン夫人訪問 (341-46)。エルトン夫妻の反応 (346-7)。

54、ハリエットとマーチンの婚約。

ナイトリーとハリエット (355)。ハリエットがナイトリーの愛と誤解したのは、ナイトリーがエマの友人としてハリエットに示した好意であった。

フランクとジェインにウェストン家で会う (358-65)。

55、ハリエットの素性が分かる。父親は金持ちの商人。エマ、マーチンと会う (368)。

エマのハリエットへの親密さの変化——「幸いいずれ起こるべきことや、起こらないではおかないことは、たいそう緩慢で自然なやり方ですでに始まっているようだった」 (369)。

ハリエットの結婚式 (369)。エマの結婚式 (369-71)。

2) 論点

このシュノプシスは、主人公エマがおろかな娘ではあったがナイトリーの影響で対人的義務意識に目覚め (18, 38章)、くり返し自分の責任を痛感する (18, 38, 43, 47, 48の

各章など) ことを指摘している点で、すでに従来の研究者の見解と異なっている。この作品は、わずか一年内のエマ・ウッドハウスの成長史であるから、上のように発展史的に記述することがとりわけ意味を持つ。そうしてみれば、たしかにナイトリーが言うように「甘やかされて育った子が嫌いだったが、だんだん気にならなくなった」(ch.53.461^⑧) 歴史であるから、重要なのはエマの考えなしの行動が次第に思慮に重みを帯びてくる過程である。したがって、どのようにエマの思慮が深まっているのか、と問わなければ、この作品を読んだことにはならないのである^⑨。そうしなければ、彼女の〈不徳義漢〉よりも問題にならずに終わってしまうだろう。だが既に引用した我が国の研究者たち、および『ジェイン・オースティン事典』の編者ポール・ポラウスキー氏をはじめとし^⑩ インターネット上に展開している無数の英語論文の論者たちはそういう問題にはまったく無頓着である。

もしこの義務意識、倫理感が作品解釈上重要性を持っていることを指摘し得たならば、その当然の帰結としてエマが〈不徳義漢〉としてこの作品のクライマックスを迎えることも理解し得たであろう。作家が「自分以外には誰もあまり好きになれそうにないヒロイン」と呼んだ意味も正しく理解することが出来たであろう。また、それでは何故、オースティンはこのヒロインを好きになれるのか？という問いを抱くことも出来たであろう。

もしこのようにエマに対して「不徳義漢ではないか？」という疑いを抱くことがなければ、この作品のさらに高級な？思想に思い至ることなど決して出来ないであろう。それはじっさい、このような事柄である。上に示したように、エマはナイトリーの働きかけによって道徳意識を育まれて来て、自分の要らざる・しかも誤解を重ねた介入によって、ハリエットにナイトリーに対する恋情、結婚の期待を持たせてしまったことを痛烈に後悔する。それは、道徳意識のまともな人間ならば避けては通れない悔恨である。ところが、エマは後悔をくり返しながらも、〈行動〉において責任を感じる者の取るべき方向に向かわない。つまりナイトリーに、事情を話すなり黙したままなり、ハリエットを選ぶように勧めるとか、少なくとも自分自身はキッパリと彼を諦めるという方向である。彼女はそうはしなかった。ハリエットと逢わないことに決めて (416-7)、ついにはロンドンの姉の元へやってしまう (450-51) し、ナイトリーに愛を告げられるとこれを受け容れてしまうのである。作家は一見開き直ったかのように、彼女については「(そういう) 英雄主義的な感傷は持ち合わせがなかったからだ」(431) と書いているのである。どのような論理が働けば我々はこのヒロインを正当化することが出来るのだろうか。何を訴えられれば読者はこのヒロインが好きになれるというのだろうか？

第二節 問題点の明確化の試み

いま我々の問題とすべきは、直接にこの上に掲げた問題に対する回答を示すことではない。これほどにオースティン熱が広がっていると言われながらもその最高傑作とされる『エマ』の主題として上のような問いに関わるものであることが完全に隠れている時代であるから、先ずはじっさいにこのような問いを問うことこそが大事であることを示さねばならない。

そこで敢えてもう一度シュノプシスを振り返ることにしよう。38章でエマの目覚めが始

まり、43章で生涯での最高の打撃ともいえる衝撃を承けての大反省をするというのであるから、この辺りから考察を開始すればさしあたりは間にあうことになるうか。しかしその大反省では、エマがベイツ夫人への態度を変えたという事実が示されるだけのことで、そのエマにおける倫理性の内容は明らかではない。次の重要出来事となるフランクとジェインの婚約露見問題で、エマがフランクとジェインの道德性を厳しく糾問し、ウェストン夫妻が間抜けな対応をして愚かさを露呈する箇所でも、道德問題を考える根拠に関してはエマは何も表明していない。ただナイトリーが立派な人間ならば如何に振る舞わねばならないかを諄々と説く18章などで、当のエマにはスナリとは受け入れられないものの、そのような高い要求のあることが読者に示されることは、それこそまともな読者であれば気づくことであろう。

さて、エマがその成長に応じた倫理的要求を突きつけられながらむしろその反対方向に行動するといった場面が始まるのは、47章からである。また、ハリエットを姉の元にやるのは52章においてだが、エマの態度決定は49章で終わっている。だから我々はこの三つの章をやり直せばよいし、やり直さねばならぬ。

47—49章の構造、

これらの章を振り返る前に、これらの三つの章には、エマの心の揺れを表した問題の在処をくじり出すために微妙な重層的構造のあることを指摘しておこう。それをまとめると、次のように示すことが出来る。

47章

○エマに高級義務superior dutyの意識があったことの確認 (402-3)。

ただし、エマの身分意識 (402)。——これによって、後に良心の呵責なくハリエットを退け得る (431)。

①ハリエットがナイトリーを想っていることを知った途端に、自分がナイトリーをなくてはならぬ存在として恋していることに気付く (407-8)。

②ハリエットへの責任の自覚 (408)。

事実確認など。

③大反省、後悔 (411-13)。自分の虚栄心——漱石『それから』では「道德欲の満足」。

④新しい欲求 (利己心) ハリエットとナイトリーの結びつきは「あってはならないこと」 (413)。

⑤「偶然と状況が〈第二の原因〉として運命を支配する」 (413-14)。

「神意の承認」と自分の小賢しさへの反省。

48章 47章とよく重なることに注目せよ。

①ナイトリーへの愛の自覚 (415)。

②自分の意志を確認し、それを押し通そうとするエマ。「ナイトリーに申し込まれても私は結婚しないつもりだ」 (416)。

③ハリエットとの隔離を決めるエマ (416-7)。

④ミセス・ウェストン来訪 (417-)。

ジェインの罪と罰といった問題——エマには当然現在進行中のハリエット問題での自責

の念を強めさせたであろう話題（特に419）。

⑤苦痛、「喪失への予感」（421-23）。

⑥高級倫理への決意（423）。

49章 ナイトリーの来訪。フランクとジェインを話題にしながら。

①ナイトリーの愛の告白（429-30）。

②「英雄主義」の拒否、感情の行動（理性）への優位（430-31）。

さて、

47章

○ 前の章でウェストン夫妻からフランクとジェインの婚約中であることを聞いたエマは、自分自身への侮辱はさておいても、ハリエットとの関係で「どうしても払拭できない苦悩the tormenting idea which Emma could not get rid of」「本当の惨めさreal misery」（402）を感じざるを得ない。自分に〈良識common sense〉が働いていたなら、先にハリエットが思う人のことを口にして、その人が「エルトンよりもずっと身分の優れた人」であることから「私は絶対に結婚しません」（341）と言い出したときに、「彼はあなたより身分が優れていることはたしかよ、それに大変厄介な反対や障害があるとは思うけど、でもね、ハリエット、これよりもすごいことも起こっているし、もっと身分の違う結婚だってあったのよ」（342）などと言って「ハリエットの抑えたかもしれない感情を鼓舞する」（402）ことはなかっただろう。だが良識の持ち合わせが殆どなかったのを、今認めざるを得ない。それで、ハリエットを守ることは〈高級義務superior duty〉だと思わざるを得ないのだった（403）。

① これほどに覚悟し、緊張して伝えに赴いたのに、ハリエットはすでにウェストンから直接聞いてその奇妙さは感じているものの、落胆している様子などどこにも見えない。それは、何と！ハリエットの意中の人はナイトリーだったからであった。頁を捲り返してみると、ハリエットが敢えて名を出さずに指し示している相手を、たしかにエマは見事に勘違いをしている。40章p.337-40。そしてエマの勘違いであったことを知っても、ハリエットは言う。

「あなたは私にとって一人の方がもう一人にくらべて五億倍も上だと考えているにちがいません。ですけどね、ミス・ウッドハウス、もし、おかしいことのようにかもしれませんが、でもあなたの言葉を借りれば、ミスター・フランク・チャーチルと私よりももっとすごいことが起こっているし、身分の違う結婚だってあったわけだから、こんなことも今までに起こったかもしれないでしょう。——だから、もしミスター・ナイトリーがほんとに——身分の違いを気にしないで、また私がもし言葉には言い表せないほど運がよかったら、ミス・ウッドハウス、あなたは反対して邪魔をするようなことはなさらないでしょうね？あなたがそんなことをするような人でないことは確かだわ。」（407）。

エマは、「ミスター・ナイトリーがあなたの愛に答えてくれる感じがあるの？」と訊き、ハリエットはつつましく、しかし恐れているような響きなしに答える、「ええ、予感があると言わざるを得ません」（ibid）。

エマは身動きできず、しばらく静かに物思いに耽る。二、三分もすると、考えがまとまる。——それは恐ろしい考えであったはずだが——ハリエットのこの答えを切っ掛けに、

今まで思わなかったことが出てきたのだった。こう書かれている。

「彼女のような知性は、ひとたび疑惑を抱くと一気に進む。エマは真実の全てに触れ——知り——承認した」(407-8)。

何故か作家の解説語はこれだけに抑えられているが、エマは自分がナイトリーを愛していたこと、今なお愛しているのは彼であること、を知り、承認したと言っているのだ。そのことは、さらに、「ハリエットがフランク・チャーチルではなくてミスター・ナイトリーを恋したとして、それがなぜそんなにいけないのか？ハリエットの恋に何某かの報われる希望があるということで、なぜ災難がそれほど恐ろしく増大するのだろうか？矢のような速さで次の思いが彼女を貫いた。ミスター・ナイトリーはわたし以外の誰とも結婚してはならない」(408)という言葉で、もっと明らかになる。

ハリエットがナイトリーに想いを懸けている。それを知ってエマは、いままで気付かないで来た自分自身がナイトリーを愛していることに気付いた。ハリエットは自分がナイトリーに希望を抱くようになった経緯（彼に愛されているという証拠）を挙げ、エマは自分にも思い当たるナイトリーのハリエットに対する高い評価を、あれは愛ではないと否定の可能性を祈りながら語る（408-11）。ナイトリーが愛してくれているとしてもそれほど不思議ではない、と自負の念を表明するハリエット。エマは辛い感情を引き起こされながら、辛うじて、「ハリエット、ミスター・ナイトリーはどんな女性に対してでも自分が実際に感じている以上のことをわざと言うような真似はしない人なのよ」と口にする。その言葉に心が満たされ、崇拜の眼差しをエマに向けるハリエットを見ることは、エマにとって恐ろしい苦行であった（411）。

② 「この同じ数分の間に、エマの（もう一つ別種類の）心だけでなく振る舞いが彼女の目の前にあった」(408)というのは、このようにナイトリーは自分のものだといいながらも、ハリエットに対して自分が行ってきたことが余りに理不尽、不適切であったのが見えるということである。「私の行いは何と軽率で、思いやりに欠け、不合理で冷酷であったことか。何たる盲目、何たる狂気に導かれてきたことか！——ハリエットは自分に対して好意と関心を失うことはなかったし、自分に対して一度としてなおざりにされても文句の言えないようなことはしたことがなかった。」(408)

③ それから後と夜の時間をエマは考え事に費やしたが——」(411)、それは自分のこれまでの数々のしくじりの想起。他人に騙されていることだけでなく、「自分自身さえ騙している惨めな存在であること、おそらく今日が惨めさの始まりであることなどがわかった」。「自分の心を理解すること、完全に理解することが彼女の最初の努力であった」(412)。「すべての人の感情の秘密が自分には分ると思っていたのは虚栄心によってだった。すべての人の運命の調整役を買って出たのは、許しがたい傲慢によってだった」(412-13)。——真に依拠すべきものを忘却していたため。

④ かく反省しながらも、ただちにエマはこう思う。「ナイトリーとハリエット！それは（エマにとって）同種のあらゆる驚くべき結婚をはるかに寄せ付けない縁組みだった」(413)。「ハリエットには願ってもない玉の輿だが、ナイトリーは身分が大いに貶められることになる！——それで世人の見るところ彼の評価が下がり、微笑や嘲笑や笑いさんざめきを引き起こすことは間違いないし、弟（エマの義兄）を苦しめ、軽蔑を買い、彼の身

に数知れない不都合が起きるだろう。——それはありうることだろうか? いや、あつてはならないことだ」。これは、どうみても作家があゝの『プライドと偏見』で笑いものにした、(ダーシーの叔母である) キャサリン・ダバークの利己心そのもの、いやらしさそのものとも言うべき主張である。だが、読者にこのいやらしさが克服されて見えなければ、エマは悲劇の主人公たり得ないであろう。

⑤ しかしこのようなことは「決してありえないことではない、全然ない。一流の能力をもつ男がきわめて劣った能力の持ち主のとりこになるということは、耳新しい状況だろうか。——何であれこの世のことがらが不平等で矛盾していて不釣り合いであるということ、あるいは言い換えると偶然と状況とが〈第二次原因second cause〉として人間の運命を支配するというのは他に例を見ないことであったらどうか?」。ここではナイトリーがハリエットと結びつくという自分にとって不都合なことも生起する可能性があるとしてエマが思う、というだけのことであり、またエマの悩みを深めるのであるが、まともな読者ならばここで偶然と状況を「第二次原因として」などと固い・重すぎる言葉で言い表していることに注意せずには済まさないであろう。作家としては〈第一の原因〉としての神の摂理を、次に問題にしなければならない最も興味ある場面を展開するための隠し球にしておき、少なくともここでエマの「神意の承認」を匂わせているのだ、と我々は読まなければならないであろう。言い換えるならば、ここに後で述べるこの作品に関する最大の疑念に対する回答の鍵があるのだ。

彼女はまた、自分が小賢しく介入などしなければ「こんな恐ろしいことは起きなかっただろう」(414)と反省する。

48章 次の三項目は、前章③に続く24時間のうちに為された思索。

① 「エマは自分の幸福が失われる恐れに瀕した今の今まで、その自分の幸福が自分がナイトリーにとって第一の人、つまり関心と愛情の第一の対象であることに懸かっていることに気づかなかった。——そうであることに満足しきり、それが当たり前だと感じて、彼女はあらためて振り返ることもせずその立場を享受していたのだ。そして、取って代わられる恐れに直面した今になって初めて、それがいかに言葉には尽くせないほど大事なことであったかを知ったのである」(415)。これは先の「ナイトリーは私以外の誰とも結婚してはならない」(250)という思いを解剖したものであるが、繰り返しには意味がある^①。

② 身勝手な自分の意志を確認し、それを押し通そうとするエマ。ハリエットがナイトリーの好意を過大評価しているだけで、というのはエマの希望であるが、それを「ナイトリーのために願わねばならない。たとえその結果は自分にとって何の得にもならないで、ただ彼が生涯独身を通すだけであるとしてもだ。彼は決して結婚しない、ということが確認出来るだけでも自分は満足だ、とエマは思った」(416)。エマ自身は、とりわけ父親のことを考えると自分は結婚して家を出ることはできないと思っている。「ナイトリーに申し込まれても私は結婚しないつもりだ」(ibid)。ただナイトリーが今まで通り近くにいてくれることだけが、彼女にとってはどうしても必要なのだ、というのだ。まるで天が自分の周りを回することを望んでいるような、幼児性の見解ではないか。

③ ハリエットとは会わないように決め、手紙で知らせることにする (416-7)。

④ ミセス・ウエストンが来訪して、ジェインの話を報告 (417)。エマは好奇心を覚えて

聞く。ジェインの罪と罰といった問題に、エマは自分も彼女を不幸にすることに一役買ったのではないかと問う。「あなたの場合には気付かずにやったことだから罪はない——」とミセス・ウェストン (419)。気付かずにやる幼児性と気付いてからの罪責感は交互にやってくる。自分がいまハリエットに対して現在進行形でしてのけている仕打ちは、エマには当然自責の念を強めさせることを我々は思わねばならないだろう。

⑤ エマはウェストン夫人と別れてから、ジェインとのこれまでの関係を改めて反省する。彼女を友としていれば、いまのハリエットによる苦痛はなかっただろう。ジェインも去って行く、ナイトリーも遠い人になるのではなかろうか。こうした「喪失への予感」に苛まれ惨めな思いをつのらせる (421-2)。

⑥ 「エマの慰めや落ち着きを得られる唯一の源泉は、自分をもっといい行いをするんだという決意の中にあり、あるいは——もっと理性的になり自分を知り、時が来ても悔いることなくなりたいという希望の中にしかなかった」(422)。高級倫理への決意と希望だったのだ。(しかし、このように〈安心〉が行いだの希望だのにあるというのは、それ自体が怪しいのだ)。

49章では、エマがフランクを愛しているものと思い込みロンドンに身を避けていたナイトリーがフランクとジェインの秘密の婚約話を聞いて、エマを慰めるために来たのだ。エマはエマでなおナイトリーの意図を誤解していたのだが、

① ナイトリーはフランクの不徳義漢ぶりを非難し続けながら、ついにエマに愛の告白をし、彼女の愛を勝ち得る見込みはないのだろうかと問う (430)。

② エマは、ナイトリーにとってハリエットは何ものでもなく、自分がその全てであったことを知る。ここでエマの態度決定が問われる。エマは、ハリエットが思いを寄せている相手を勘違いからフランクだと思ったが故に励ましたのではあったが、その早とちりの責めはエマにある。これまでの高級倫理への決意、不徳義漢であってはならぬという人間一般に関する倫理意識を寄せ集めれば、ここではナイトリーをハリエットに譲るという決断も一つの選択肢である。じっさいエマはフランクをハリエットに譲る決意は¹⁹してのけているのだから。だがエマがハリエットのためにしたのは、ハリエットが小さな胸をナイトリーの為に焦がしているという秘密を漏らさなっただけ。「それがエマが彼女の哀れな友に今してやれる全てであった。というのも、エマを促して、彼の愛情を自分から——自分よりもはるかに優れているのだからハリエットへと変えるように嘆願させるような英雄主義的感傷 that heroism of sentiment も、あるいはまたもっと単純なのだが、ナイトリーは彼女ら二人を妻にすることはできないのだから、動機には一切触れずに直ちにまた永遠に彼を拒むという崇高な決断さえも、エマは持ち合わせなかった。彼女はハリエットに同情し、苦痛と悔恨を覚えた。けれども、あらゆる可能性や合理性に対立する狂気の飛躍した寛大さ (flight of generosity run mad) は、エマの頭には入ってこなかった。彼女は友達を惑わせてきた。それはいつまでも彼女を非難し続けるだろう。しかし彼女の判断力は感情と同じだけ強く、これまで通りそうした縁組みは彼のために極めて不釣り合いで品位を下げるもののだとして非難した。彼女の進む道は平坦ではないが、はっきりしていた」(431)。こうして、エマはナイトリーの愛を受け容れたのであった。

以上のように、『エマ』においては主人公エマが、ナイトリーの嚮導によって次第に道徳的な生き方の重要さを学んで行き、なかなずくハリエットに対しては〈高級な義務〉に目覚めさせられている。そして47章と48章において繰り返しこの義務・責任およびそれを果たせぬ苦悩、それに背く新たな意志、さらに新たに善く生きようという決意が語られている。これらのことに目が向かないというのでは、誰もまともな読者であるとは言えず『エマ』の真価を正当に評価することはできず、オースティン王国の一員になることなど出来はしないであろう。

たしかに、この先、物語はエマがナイトリーと結婚すると共に、ハリエットがエマの説得により一度プロポーズを退けたマーチンから再度プロポーズを受けて結婚するに至るといふ、バカバカしいほどのハッピーエンドの物語で終わる。だが、それでは48章までに積み上げてきた高級倫理の問題はどうなるのか。読者自身が立ち止まって考えるようにと、作家は何らかの仕掛けを設けているのではないだろうか。作家自身は〈没義道〉だの〈不徳義漢〉だのという表現はしていないとしても、「英雄主義的感傷への否定」が言葉になっている。鋭敏な読者はここにその言葉を念頭に置いて問題の行方を突き止めなければならないだろう。

第三節 『エマ』の謎 新しい問題点、そのクライマックスは何処にあるのか？

文芸作品の制作論において、劇においては立派な人間を描くのが悲劇であり、愚かな人間を描くのが喜劇であると指摘したのはアリストテレスであった^⑬。上のように立派な人間を〈成長史〉として描こうとしている『エマ』は、それではそのクライマックスを何処に設定しているのか？そんなものがなくて、オースティンの最高傑作たり得るのか？

私は次のように問うて行きたい。

謙遜の徳を身につけ、〈悲劇〉の主人公となるエマにおいては、まさに英雄的な振る舞いのできる状態になっているはずであった。とするならば、彼女がいま選ぶべきは、自分の軽率な判断、自分の存在、自分の言動が原因となって生じた哀れなハリエットに対しては、ここは——このハリエットの恋には相手があることであるから、やがてはナイトリーの選択を通してエマの上の方に幸運の女神は微笑み給うとしても——さなくともフランク問題ではすでにそうしているのであるから、ここでは〈高級倫理観に従って〉恋の相手をハリエットに譲って、自らは身を引くべきではなかったか。自分の後から思い当たった恋情のために、自分が熱を入れて動かしていた〈友人〉を裏切るのは不徳義漢のすることではないか。たしかに——とはいえ、何度くりかえしてもいいだろうがオースティン研究家もほとんどはこの点にさえ気づかないで通り過ぎているのであるが——この作品では、エマはこの問題を巡って苦悶しているのである。高級倫理観は生きているのである。それならばこそ、先行作品『プライドと偏見』（ダバーグ夫人問題）と最後の大作『説得』（スミスさんの思想）までを貫き、人間として如何に振る舞うべきかの問いを制作意図から外したことの無いオースティンは、どうしてそのような展開を取らなかったのか。その方が作品は遙かに重厚なものに仕上がっただろうに——と。

ところが、よくよく読めば、オースティンは、自分が書いた作品の主題の抱えている問題をよく理解していたと思われるのである。たしかに主人公は〈不徳義漢〉として描かれ

ているのである^⑭。彼女を英雄として描いて終われば、甘やかされて育ったバカ娘のエマも、終わりよければで悲劇の主人公になることができたのではあるが、しかしながら、また、作家はこの作品で、大方の読者の手には負えないかもしれない高級なテーマを追うものに仕上げたのである。そのことを自覚していたが故にこそ、作家はこの小説の主人公は「わたし以外には誰からもあまり好かれそうにないであろうヒロイン」と思っていたのであろう、と思われる。では、作家オースティンの頭の中では明瞭であったこの作品の筋書き、思想内容はどのようなものであったのだろうか。

書かれているがゆえに当然読み取られるべき筋書き

筆者は、右に触れたように、この『エマ』には、(通常ひとは読み飛ばしているようだが)〈書かれているがゆえに当然読み取られるべき筋書き〉(ただし〈隠し球〉とでもいうべきものもある)があるのだと考える。それがあるがゆえに、作家自身はこの愚かな娘を、大方の読者には受け入れがたいが自分自身には愛しい主人公、として受け入れていたのであるに違いない、と。

(1) 解答の鍵はまずは既に指摘した47章にある。^⑮ ⑤番目の論点として、私は作家がここに哲学論文でもないのに敢えて〈第二次原因〉などという言葉を持ち込んでいる、と先に指摘したが、それは「この世の何事であれ、不平等で、矛盾して、不釣り合いなこと」言い換えると、「偶然と状況」が「人間の運命を支配する」第二次原因として働いている、というのであった。では〈第一次原因〉は何であるのか、というのが当然の問題になる。これを問題にするならば、作家が「人間の運命を支配するもの」として神的存在を想定していたことは否定しようがなくなるであろう。つまり〈第一次因〉としての神の摂理が〈隠し球〉として実はそこに効果を発揮する、ということなのである。それが自分の小賢しさへの反省を伴って記述されているのである^⑮。

(2) 第二に、第一の論点の意味をさらに補足するものとして、先に一面的にのみ切り取った第48章の文章がある。

「エマは自分の幸福が失われる恐れに瀕した今の今まで、その自分の幸福が自分がナイトリーにとって第一の人、つまり関心と愛情の第一の対象であることに懸かっていることに気づかなかった。——そうであることに満足しきり、それが当たり前だと感じて、彼女はあらためて振り返ることもせずその立場を享受していたのだ。そして、取って代わられる恐れに直面した今になって初めて、それがいかに言葉には尽くせないほど大事なことであったかを知ったのである」(415)。

この傍線箇所は、いま問題にしている事柄の最重要箇所である。ナイトリーの存在がどうしても必要であることに、彼が自分の傍に居て当然と思いずっと傍に居るだろうと思っている間は気付かなかったのに、それが危うくなつてはじめて切実にその存在意義を知ったというのである。

エマはおおらかなバカ娘として育ったのだった。人間なら二十歳にもなれば当然、人生の一大事としてその存在の拠り所となっているもの(=神)を知り、その上で安らいで日々の生活に勤しまなければならないのであるが、彼女はナイトリーの嚮導にも拘わらず十分な知的な発育をし損なっている(ミス・テイラーにはその力は全く欠けていた)。そ

のために彼女は「虚無思想」とでも呼ぶべきものに陥ったのである。「彼女は父親がくつろぐようすを見ればうれしかったし、うまくいっていると思えば大変喜んだ。けれども、三人のそんな女性たちのもの静かな退屈なお喋りprosingsは、こんなに過ぎて行く毎晩は、彼女が不安をもって予期して来た長い夜なのだと、彼女に感じ入らせた」(22)。そのような日を送っていた彼女に、ある朝、今日もそのように暮れるのかと思っているところにハリエットが現れる前触れが来るのである。こうしてエマは、退屈さを紛らすために他人を自分の意のままに結びつけようといったお節介に出るのだった。

この存在根拠を忘却していることの別の表れは、彼女の自然本性に背くいろいろな行動となる。48章だけを取っても、論点②にあげた箇所では、エマは父への義務を果たすために自分は「たとえナイトリーにプロポーズされても結婚はしない」と言うのだが、父親を扶養すること(孝養)と、その創世の初めに「人がひとりでいるのは善くない。彼のためにふさわしい助け手を造ろう。」「それで人はその父と母を離れて妻と結び合い、一体となるのである。」^⑬という神の定め、神慮とは、同列に並べられないことであろう。後者を無視することは人間存在の自然に背くことであろう。

論点⑤の「喪失への予感」によるエマの苦しみも、真に存在するものと変化するものとの価値を混同することによる。論点⑥は、「高級倫理への決意」だが、じつは一年以内の慌ただしい嚮導によって彼女が「倫理的に善い人間」になろうとしたところにさえも、根拠忘失は見られるのである。因みにこの「恋人を譲る」という同一形式で捉えられるエマのフランクをハリエットに譲るという文言のある場面^⑭においては、じつはエマは好ましいと思っていたハリエットとフランクの関係が(事件をきっかけにしてだが)「万事が自然の流れnatural courseを取り、強制もされねば援助も受けない」で(335)行き始めた、と思っただけだったのだ。自分の自然な感情を枉げて友誼を貫こうとするのは、却って〈虚栄心〉という「罪」^⑮に陥る恐れが多分にあるのだ。

こうして、実に倫理的・英雄的振る舞いを好むようになったエマであっても、ハリエットとナイトリーの間を取り持つという方面には出ず、それどころか、ハリエットを遠ざけるという方向を取ることは、それ自体が、一見するところ〈信義に悖る〉振る舞いと見なされるであろうが、「自分の存在根拠に開眼することにより、神の定めた自然本性への背反から自然本性へと立ち返る」という文脈においては、人間の正当な振る舞いとなるのである。

第四節 拙論の補強

筆者は少しばかり『エマ』を勝手に読み込み過ぎたであろうか？勝手な理屈を並べただけであろうか。

私は『エマ』における「英雄主義的感傷の放棄＝エマの不徳義性」の問題性とその正当化を試みてきた。この論に無理があるかどうかは、オースティンの他の作品に照らしてみるとよいだろう。オースティンはたしかに哲学者でも文学者でもなかった。彼女は自分の作品を学術的タームによって補強するということはなかった。そのために彼女の作品は文章が自然の流れを保つことが特徴だと見られた^⑯。しかしながらオースティンは只の物語作者ではなく、その豊かな教養を背景にして^⑰、人間の如何に生きるべきかを見詰め、あ

るいは人間の如何に生きるべきかを作品に刻み出して生きる、そういう作家、本来の文学者であった。とすると、人間の生きるべき道、生き方というのは、一人の作家が書く場合にはそう突拍子もなく多様性を以て変わった姿を取るものではないであろうから、いずれの作品にも類似の主題が通底していることになる。

『プライドと偏見』

この書物では、人間の「利己的であること」に関しては自らもそれと認めざるを得ないエリザベスが、人間の窮極的な態度決定のあり方については、キャサリン・ダ・バークへの批判として次のような見解を披露する。

キャサリン夫人は甥のダーシーがエリザベスと結婚するという噂を耳にして、ダーシーは自分の娘と娶せることになっているのでそんなことがあってはならない、エリザベスにその噂を否定せよ、と詰め寄りに来たのであった。

①ダーシーと娘とは親同士が二人の赤子のころから取り決めている約束であり、これを「生まれも劣り、世間に何の重きもなさない、赤の他人に邪魔されること」に耐えられぬキャサリン夫人に対して、エリザベスは言う。「私と甥ごさんの結婚について、ほかの反対がないのでしたら、彼のお母様と叔母様がダバーク嬢に娶せたいと思っていらしたとお聞きしたからといって、私は思い止まらされるということはないですわ。あなた方お二人は、結婚の計画に出来るだけご尽力なさったんです。それが完成するかしないかは、他の人たち次第なんです its completion depended others」(355^②)。

この「他の人たち次第」というのは、さし当りはその後に来る文章からしてダーシーや自分が想定されていると見られる。しかしながら、ここは「人事を尽くして天命を待つ」という日本語があるが、当にそれに該当する状況だと思われる。その点、次はどうか。

②「これだけはぜひ分かって貰いたいのですよ、ミス・ベネット。私は自分の目的を遂げる断固たる決心をしてこちらにまいったんですよ。また、何とおっしゃっても、決心は曲げませんからね。私はどなたの気紛れにも屈従したことがないのです。私は、失望に耐えるなんてことには、慣れてないのです」(356) という夫人に対して、

「それでは、奥様の現在のお立場を、なおのこと惨めにしますね」。

「そら、出た！」と言っていいであろう。どうして「奥様の現在のお立場を、なおのこと惨めにします」と言うのか？エリザベスが、自分がその期待に応える積もりが全然無いと言うことは、ただ夫人を落胆させて終わりであろう。「なおのこと惨めにする」のは、この夫人の発言が、立ち入って聞けばそうでない場合よりも一層惨めな、不幸せなものであることがはっきりするという以外にはありえないのではないか。では、それは何故なのか？この世間の力ある者が、その力に任せて押し通そうとすることそのことが、自分の頭の上に自分で重しを載せる業以外のことではないからである。なぜならば、たとえば財産を二家族分に倍増させる計画が失敗するとしても、それはそれだけのことなのだが、夫人の立場はそのように「自分の意思を普きものにする」というところに留まる限り、これは言わば未来に期待して現在を放り捨てる、という奇特でありつつ悲惨な生き方を拡大することなのであるから。つまり、自分を守ろうとして自分を崩壊させてしまう方向にバイアスを掛けるのである。このような生き方に対比して、同じく自分本位に生きようとし

ながらも別の方向に向かう例は、まさにダーシーに見るがいいだろう。

ところで、エリザベスの場合は、そうではない。彼女は自分の意思を押し通すというよりは、その時々、その場その場所の必要性をかぎ分けて、柔軟に従う用意をしていなければならないと言うのである。次を見よう。

③「でも、私が一步でも後へ引くなんて思わないことですよ。私の要求する保証を与えて下さるまでは、わたしは帰りませんから」(224)という夫人に、

「私は、そんな保証は断じていたしませんわ。どんなに脅されても、私にはそんなとんでもない理不尽に屈しはいたしません」(357)。

〈自分の意志のことがら〉と〈それを超えたことがらを私しようとする事〉の相異が理解出来ないキャサリン夫人。人間は誰でも意志の自由を有し、意志の主体としてその都度意志を働かさねばならないのではある。だが、運命の支配する領域と意志決定の根源を規定する領域とは、如何に社会的権能を有する人間であってもこれを意のままにしようとするのは誤っている。それは「とんでもない理不尽なこと」なのである。

『説得』におけるスミスさん

このいぶし銀のような作品では、主要な物語の筋に沿った仕方でも²²当然問題のエマの〈思想〉を見出すことは容易なのだが、この『プライドと偏見』で見せた一つの重要思想は、主題と外れた処でもコンパクトに面白く論じられている。

17章

かつては「かなり派手な社交生活を送っていた」にも拘わらず「かつて眼を懸けてやった後輩の訪問を有り難い好意と受止める、貧しい、病弱な、寄辺ない未亡人」(153)と記されるだけで、もう生活の暗さのみが想像されても不思議ではないスミスさんは、「予想を越えた話好きで陽気な性質」(ibid.)を開けっぴろげにして主人公アンを迎える。いや、もっと書くべき悲惨な状況がある。それでなお彼女がそのような態度を取れるのは何故か！というのが、ここでも問題なのである。

「アンは注意し、観察し、思案した。そして結局、それは単に意志が強いfortitudeとか、諦めがいいresignationとかいう問題ではないという結論に達した。柔順な心は忍耐強いだろう。透徹した理解力は決断に導くであろう。けれども彼女の場合、もっと何かがある。あの心の柔軟なこと、艱難をすぐ忘れる質、禍を転じて福となす能力、自分を忘れるために何かと用事を見つける才能、それはただ生得的にのみ所持されるものなのだ。それは希有な天賦の才能である。この友達は、きっと神の恵み(merciful appointment)によって、そうした天賦の才能で凡て足りない物を補っていけるように生まれついていた人なのだ」(154)ここでも「運を天に任せる」というような表現で受け取ることが出来るとしても、オースティンはさらにそういう態度がどうして取れるかという行為の原理にまで立ち入って書いているのである。

21章

ここには「自分のことを図ることは義務として通っていた」(202)というような語が見られる。自分を勘定に入れぬ「自己意識確立前」と比べればそれなりの意味も認めざるをえない「利己主義」は、いわばそれを洗練して行けばよい人生の歩き方の一里塚であろう。とすれば、エリオットを指して「あの人は利己主義以上の自らを導く原理を持ったこ

とがないのです」(208) という文章は、「それでは、利己主義以上の自分を導く原理とは何か?」という問いを導くことになる。スミスさんには、そういう原理が既に見られた(17章)ののだが、さらにオースティンは彼女を作品の末尾で次のように描いているのである。

24章

「スミスさんはこうして実入りが増え、健康もいく分取戻し、それに度々往来できる友達もできたのだが、そのため彼女の生活の楽しみが損なわれるというようなことはなかった。なぜなら彼女は例の快活さとてきぱきした気働きを、失わなかったからである。そしてこれらの善の最も重要な供給源が残っている限り、彼女は世間的な繁栄をさらに獲得してさえも、それを無視しただろう。彼女は無上の金持ちになり、完全に健康になったかもしれないが、それでも幸福であっただろう」(252)。

この文章には「彼女の幸福の源泉は燃え盛る彼女の元気の中にあった」という文章が続くが、「彼女の快活さと気働き」の供給源が「彼女の燃え盛る元気」だ、と言う訳ではない。よく見れば分かるように、ここには新約聖書的な原理が伏在しているのである。すなわち、「貧しい人は幸いだ、天国は彼らのものである。」「健康を失っている者は幸いだ、幸福の国は彼らのものである」という原理によって今の彼女は幸福なのであるから、仮に彼女が全き富を得ても、全き健康を得ても、人間の居所としての天国を知っている者には何時だって快活さや気働きの源泉はそこにあるのだからである。

こうして見ると、スミスさんの「委ね」「お任せ」思想は、その委ねる対象をしっかりと見定めてのそれであって、単なる諦め、自己放棄というものではなかった、と言えるであろう。

第五節 残る問題点

以上のように、オースティンの別の作品においても〈神ないし神的なものに委ねる〉という思想が見られることを確認することが出来た。しかしながら、もう一度振り返ってみるに、何か肝心な問題点が抜け落ちているのに気付く。エマがナイトリーとハリエットの結びつきがどうなるかを、あるいは自分の行く末を、最大限の努力をした後に神に委ねたというようなことが問題ならば、——こんな論点さえオースティン研究者は何も指摘してはいないのではあるが——以上で充分なのであろうが、筆者が自見を補強するためにオースティン作品を検討し始めたのはそのためではなかった。エマは自分に責任のあるハリエットの恋を手助けするのではなく、たまたま自分がナイトリーを必要としていることに気付いたことから、没義道にもハリエットを退け、遠方の自分の姉の家に追いやってしまったのだが、そこに如何なる道理があるのか、という問題であった。

もしこれに類似の問題をオースティンに見ようとするならば、それは『プライドと偏見』のダーシーの振る舞いの一部においてであろうか。彼は「自分の意志に背き、理性に背き、性格に背いて」なおエリザベスへの恋に拘った。たしかに諦めようと努力した。スゴイ努力をした。しかし、結局だめだった。そこでエリザベスの軍門に下ることになるのだった。ダーシーの場合は、筆者もすでに指摘したことだが、神的狂気のことがらとして最高の生が実現していると言えるのであった²³。ところがそれが、観点を変えるならば、

彼は叔母やその一族に対しては〈不徳義〉であったことになるのである。それは彼自身が自覚していたことであった。それでなおエリザベスに拘ったのは何故か？だ。

あるいはもっと広く英文学の世界²⁴に例を取るならば、たとえば『旧約聖書』の「サミュエル記下」11章以下でのダビデ王の乱行を取りあげることが出来よう。彼はウリヤの妻を見初めてその美しさに劣情を起し、それと知りながらこれを手に入れ、しかもその女が懐妊したのを隠蔽する工作をしたが旨く行かぬと見て、終にはウリヤを最も手強い敵の居る戦線に送り、これを殺させてしまうのである。だが、神の書は言う。「ダビデはナタンに言った、『わたしは主に罪をおかしました』。ナタンはダビデに言った。『主もまたあなたの罪を除かれました。あなたは死ぬことはないでしょう』」(12,13)。ここにはどのような赦しの論理が働いているのか？

この後の例はいささか極端に走りすぎていると思われるかもしれないが、問題の在処としては同類のものであると思われる。くり返し問うが、どのような論理が働いているのか？

筆者はこれに既に答えた積もりであるが、それを筆者の強引な牽強附会と取る向きに如何に答えるかをさらに問うている。ところで、その最適の解説は他ならぬ我が漱石の『それから』にある、と私には思われる²⁵。

すでにこのエマの没義道問題との関連を指摘した『プライドと偏見』の検討箇所には、面白い形で〈近代的個人意識の超克〉と言うべきものが示されていると言えよう。私たちは、ここに漱石の「自己本位」「則天去私」という言葉を持ち出すと、エリザベスの言いが極めてよく理解できることになると思う。『プライドと偏見』という作品ではそうそうあからさまに〈近代〉が語られているわけでも〈近代意識の超克〉が語られているわけでもないが、眼のある読者にはキャサリン・ダ・バークという人物のいわば〈幼稚な自己本位〉が、笑うべき仕方で描かれている。これを笑えるということは、笑うべからざる〈自己本位〉を知っている（作家も読者も）ということであり、その〈自己本位〉を純化して行けばそれが〈則天去私〉の立場になるという訳である。言うまでもなく、それは、ダ・バーク夫人と対照的に描かれる人物の生き方である。

だが、漱石思想の引用効果はもっと深い。我々のいま問題にしている事柄に対して、見事なコメントを与えてくれるのである。

ちなみに、漱石は彼の晩年の思想的立場を端的に示す言葉として「則天去私」を語ったとされるが、その考えは何処から得たのかを尋ねられて、J・オースティンの『プライドと偏見』とゴールドスミスの『ウェイクフィールドの牧師』であると応えたと言われている²⁶。しかしながら、筆者は未だにオースティンの『プライドと偏見』の何処にそれが関係するのかを示す論文に出くわし得ないでいる。テキストを読みさえすれば、すでに先に示したように56章にあることははっきりしている。我が国の漱石研究者は、怠惰のせいでしょうか？それとも何だろうか？江藤氏など、手抜きをする口実としてこういうことを言っているとしか思えないであろう。今日では、岩波書店刊の『漱石全集』には立派な索引が付いており、同全集の第二七巻30頁（その箇所は漱石の蔵書

*Pride and Prejudice*への書き込みを指しているのだが)に、LVI章に“Conversation between Elizabeth and Lady Catherine”と書き込まれていることを示している。この書き込みから、漱石が此処を特別に気にしていたことが判る。筆者がこの書き込みに気付いたのはごく最近なのだが、その他にも漱石が『エマ』を含む四つの作品を所蔵していたことが報告されている²⁷⁾。

漱石がオースティンについて晩年しばしば熱意をこめて語ったことは弟子たちによって報告されている(松岡前掲132頁)。それでいて、その作品が思想的に優れたものであることについては何故口をつぐんでいるのか、不思議である。ジョージ・エリオットと比べて「無学な女流文士」として彼女を遇していた漱石は、彼女の『エマ』に自分の最初のといってもよい本格的な思想を負っていることを、沽券に関わることでありとでも思っていたのであろうか。因みに、松岡氏によると漱石がオースティン作品を最初にまとめて読んだのは1901年、『それから』は1909年。いかにズボラで作品は一度しか読まないという漱石でも文章が変わるほどの影響を受けるには、それなりの繰り返しを以て特定の物を読んだであろうし、そうだとすると、その作品の特定は可能であろう。

第六節 漱石『それから』の論点

では漱石の『それから』はどのような作品なのであろうか。オースティンの場合と同様に、この作品についてもテキストの明証を外れて勝手なことを述べる論者が数多であるがゆえに、是非シュノプシスを提示したいのだが、紙数の都合上、今回は省略させて貰おう。

『それから』も『エマ』と同様に、短い時間における一人の人間の思想的発展相を示す作品である、と言えよう。それは人間には本性的に従うべき目的もキマリもない、依拠する神もないという「虚無思想」から、人間社会のキマリに背くことになろうとも人が(仮に衣食のためには不安は避けられないとしても)心安らかに生きるためには必ずそれに従わなければならない「自然のキマリ」があるのだ、という大人の人間にふさわしい思想への発展である。人は虚無思想に冒されている間は無自覚的に「自然に背いて」生きて行きがちなのであるが、本書の主題であるような男女の恋の問題場面に突き当たらないでしあわせに暮らしている間には、そういう荒涼とした状態にあることすら気づかないのである。

こういう訳で、この作品も『エマ』同様に、そこからまともな人間が出てくることを描く悲劇的作品である。

この作品の主たる筋は次のようである。主人公代助が、かつては恋仲にあった女性、三千代を、「友情」を恋愛に先立てるという無理をして、友人平岡に譲ったのであったが、三年後にこの夫婦と再会する。そこで、夫婦が旨く行っていない事を知り、取り分け三千代の身の上に同情して、再び彼女への愛に目覚め、三年前の決断が誤りであったことを知る。その感情は三千代に伝わり、平岡夫婦はいよいよ関係が悪くなる。代助は、自分の自然な恋愛感情を押さえて自分の「意志のこと」と言うことの出来る〈道義欲〉を満足させようとしたことを、「自然への背反」と捉え、今度は〈人間の掟に従うこと〉と〈天意に

従うこと〉との間に挟まって苦しみながら、最終的に後者を選ぶのである。

筋がこのようであれば、もはや何を断るまでもなく、これは『エマ』におけるハリエットを間に置いたエマとナイトリーの関係にびたりと重なると言わねばならない。それでは、『それから』においては、主人公の〈人間の掟に背くこと〉とも言える友人への不義は、どのように正当化されるだろうか、というのが、ここでの問題である。なぜなら、すでに述べたように、『エマ』におけるエマの道義に悖るとしか思えない態度保持は、如何にして正当化されるか、というのが本稿の先ず以ての主題であり、それが漱石を読むことによって、示されるだろうと期待されたのであるから。

さて、この作品の場合には、『エマ』やその他のオースティン作品の場合には必ずしも明らかではなかった、〈天意ないし神の意志に従うこと〉と〈道義遂行として人間の意思を貫くこと〉との比較を通じての前者の絶対的優位性というものを見ることが出来るであろう。作家はこの作品の主題を、「自然による復讐」を承けての「天意に従うこと」への回帰と捉えている。「自然による復讐」とは、主人公が「自然に従わなかったことによって苦しみを受ける・受けた」という意味であり、「天意に従うこと」は「自分の善い意志を働かせることの否定」および「世間の掟によって裁かれる」ことを意味する。ところが、この場合「世間の掟によって裁かれる」ことは「神の掟によって善とされること・赦されること」を意味する。よって、人間の生の形成論としては、主人公の選択は正しく「悲劇」として認められることになる。「悲劇」はもとより近世ヨーロッパ人の語用に拠るのではなく古代ギリシャのものである²⁸。

では、以下に作品に立ち入って、これらの点を明らかにして行くことにしよう。

(一)、利己本位の代助（「利己本位」は五年後の講演「私の個人主義」では「自己本位」）

長井代助は、役人から実業界に入りこの十四、五年来財産家になっている父親の庇護の下、三十を越えてなお何の職にも就かず家一軒を構え、書生と飯炊き老婦を置いて、自身は読書や音楽鑑賞、観劇を愉しんだり女遊び（赤坂の待合い）をしたりしている「高等遊民」である。つまり、そこから他人との折り合いなどというものは先立たせず、自分の生きたいようにやりたいように振る舞う自由領域が開けている、ということである（エマへの類似あり）。その庇護者である父親に対しても、「当初からある計画を拵えて自然をその計画通りに強いる古風な人」（197²⁹）、「自己を隠蔽する偽君子か、もしくは分別の足らない愚物か、どちらか」（127-8）と批判するのであった。ただ彼が困惑しているのは、父が持ってくる縁談であり、それは危なくなった父親の社会的地位を保全するために目論まれている。

人生への態度としての虚無主義：彼の人生態度は、その人生の目的についての考察に如実に示されている（156～）。彼は「人間はある目的を以て、生まれたものではなかった。これと反対に、生まれた人間に、始めてある目的が出来て来るのであった。最初から客観的にある目的を拵えて、それを人間に付着するのは、その人間の自由な活動を、すでに生れる時に奪ったと同じ事になる」（156。下線は上野）と考えてきた。ここでさし当たり触れられているのは、たとえば彼の父の年代の者が言うような、「人間という者は国家のために身命を擲つ目的を持って生まれてきたのだ」などという目的の否定である。だが、同

時にかのソクラテスの〈善美〉やアリストテレスの〈最高善〉のような「究極目的」も否定されているのである。前者は「客観的なもの」だが後者は「客観的」でも「主観的」でもない。代助が「働らくのもいいが、働らくなら、生活以上の働でなくっちゃ名誉にならない。あらゆる神聖な労働は、みんな麵麩を離れている」(94)と言うとき、「神聖な労働」なるものが〈人生の目的〉として述べられているかのようなのであるが、この時点では彼には〈神〉は語れない。「彼は神に信仰を置くことを喜ばぬ人であった」(133)のである。ということは、口では「神聖な労働」杯と言うが、彼は〈神〉を自分とは無関係なものとして、あらぬところに祭り上げているのである。

したがって、「働くなら、生活以上の働でなくっちゃ名誉にならない」と述べて一種の目的を見出しているかのようなではあるが、それは「この根本義から出立した代助は、自己本来の活動を、自己本来の目的としていた。歩きたいから歩く。すると歩くのが目的になる。考えたいから考える。すると考えるのが目的になる。それ以外の目的をもって、歩いたり、考えたりするのは、歩行と思考の墮落になるごとく、自己の活動以外に一種の目的を立てて、活動するのは活動の墮落になる」(156)というのと何も矛盾はしないことになるのである。父親の考えに反発するにも、また自分自身の生き方全体においても、自己を中心に据えてしか生きられない。「人生の目的」すら自己を真ん中にしてその廻りを回らせようとするのである。それは「道義欲」という意味でも同様であった。自分のよしとする「高尚な生活欲の満足」(美的生活)および「道義欲の満足」(道德的生活)^{③④}を中心に、世間を回らせようとするのである。

したがって、ここでの中心にある問題点は、何においても先立てるべきものへの「(まともな)信仰」(ないしは或る「理解」)が欠如していたことであったということが出来る。この〈信仰の欠如〉から、代助には——この時代の人一般がそうだ、と作家は言うのであるが——人と人をつなぐ「自然の大地」が見えないために、孤立した人間の集合になってしまったように思われる(124)。孤立は〈不安〉なのだが、〈不安〉は人間同士の間の信仰の欠如に依る以上に、その一人一人の根源・大地への信仰の欠如に依るのである。nil admirari (28)もアンニユイ(113)も同根の病理現象である^{③⑤}。また、病状が好転した徴とすべきか、ある問題(三千代問題)が昂じて来て、書物が読めない状態になると、今度は「何もするのが嫌いというのとは違って、何かしなくてははいられない頭の状態」(200)になるのだが、この状態も〈あるべき者〉を認めない虚無思想から生じているのである。

ところが、『それから』では、いろいろな意味での現実の行き詰まり(とりわけ三千代問題)を打開するための策として、「自然」に背いていたことの反省を通して、自然の自然たる神的なものへと開眼するに至るのである。

平岡夫妻の登場

このような代助の平穏ではあるが不穏因子を押し隠している世界に、三年ほど関西に職を得て去っていた友人平岡夫婦が失職し帰ってくる。平岡とその細君三千代の兄とは〈学校〉では親しい同級生であり、卒業後一年間は兄弟のように往来した仲であった。そして三千代とは、「兄は趣味に関する彼女の教育を、凡て代助に委任した如くに見えた」(243)のであり、ということは代助と三千代は繊細の精神の機微がよく分かるほどの仲

であった。二人は恋仲であった。そのことは後に代助が「僕の存在には貴方が必要だ。どうしても必要だ」(245)と打ち明け、さらに「僕は三、四年前に、貴方にそう打ち明けないければならなかったのです」(同)と言い、三千代が「打ち明けて下さらなくともいいから、何故」——「何故棄ててしまったんです」(246)と言うところから明らかである。また、「代助は二人の過去を順次にさかのぼってみて、いずれの断面にも、二人の間に燃える愛の炎を見いださない事はなかった。必竟は、三千代が平岡に嫁ぐ前、すでに自分に嫁いでいたのも同じ事だと考え詰めた時、彼は堪えがたき重いものを、胸の中に投げ込まれた」(207-8)と記されていることから。

そして代助は、嫂の「先祖の拵えた因縁」ではなく「自分の拵えた因縁」で貰う相手が居るかどうかの問いに対しては苦笑して答えない(49)が、折に触れて三千代の写真を眺めたり(17)、彼女のことを思っていたこと(21など)が問題の前触れとして散見される。

平岡は、やがて新聞社に職を得ることになるのだが、生活はだいぶ荒んでいる。まず金銭面。妻の三千代が代助を訪ねてくるが、それも金策が主。「代助は、この女にこんな気恥ずかしい思いをさせる平岡の今の境遇を、はなはだ気の毒に思った」(61)と書かれているが、気の毒に思った相手はじつは、平岡より三千代自身であった。彼女は、一年前に産後にこどもを亡くし、さらに自身心臓を悪くしている。

(二)、利己本位の破れ目 自然の制裁の自覚

平岡と逢って自分との乖離を思う代助(124)。ここには三年間のブランクがある。平岡の側では生活者として世間にまみれることによって自ずから世故に長けてくることによって(88、121～)、他方代助の側では、この当に三千代問題を介して、人間と孤立してしまったという感を抱くに至っている。代助はそれを「文明は我らをして孤立せしむるものだ」と解釈している(124)が、その隔離は「兩人の間に横たわる一種の特別な事情のため、——世間並みよりも早く到着した」(125)。これは代助が実は三千代を愛していたのに、平岡に頼まれて三千代を平岡に周旋した事をさす。彼はこの女性への愛よりも友への友情を先立てた事に対してずっと「過去を照らすあざやかな名誉」(125)と思っていたのだが、——というのは、ここに彼は〈道義欲の満足〉覚えていたのだ——彼女の落剥ぶりを見て以来、「三年経過するうちに自然は自然に特有な結果を、彼ら二人の前に突き付けた。彼らは自己の満足と光輝を捨ててその前に頭を下げなければならなかった。そうして平岡は、ちらりちらりとなぜ三千代を貰ったかと思うようになった。代助はどこかしらで、なぜ三千代を周旋したかという声を聞いた」(同)と書かれることになる。ここには平岡が彼女と代助が惹かれ合っていたことを知りながら、結婚したことが示されると共に、代助が自然に背いたことが示されている。ただし、恋仲にある女性と一緒にいることを「自然」と呼ぶには、むしろ上で『エマ』解釈に「創世記」を用いたように、「神慮」「神意」とは言わないが、「天意に従う」と言うところからしてである。代助は、天意(人間の真の目的)を知らず、自然に背いて三千代を友人に周旋したのであった。

さて、代助は既に触れたように、「高尚な生活欲の満足」と「道義欲の満足」とを冀う男であったが、それらは決して主義として何らかの形を取るものではなかった。したがっ

てそういう〈願望〉〈嗜欲〉が起こるたびに、それを遂行すればそれで済んだ。「彼は普通にいわゆる無目的な行為を目的として活動していたのである」(157)。ところが、それでは当然ながら、虚無思想を紛らわす「努力」を引き起こし「達成感」を感じさせることにはならない。つまりは「自分の活力に充実していない事に気がつく」(同)。「彼はただ一人荒野の中に立った。茫然としていた」(158)。

彼は「高尚な生活欲の満足」と「道義欲の満足」がどこかで衝突する事を予感しており(158)、そのために普段の生活では生活欲を低い程度に留めて我慢していたという。たとえば、彼の室は普通の日本間であり、「これというほどの大した装飾もなかった」。これが彼の持っているもう一つの根本性格としてのアンニユイに、また「何ものにも驚かない事 *nil admirari*」に結合している。しかし彼はいま、これを反省する。

「これほど寝入った自分の意識を強烈にするには、もう少し周囲の物をどうかしなければならぬと、思いながら、室の中をぐるぐる見回した。——最後に、自分を此の薄弱な生活から救いうる方法は、ただ一つあると考えた。そうして口の内と言った。『やっぱり、三千代さんに逢わなくちゃいかん』」(158)。

代助の三千代に対する感情は複雑である。ここを見ると、代助は決して純粋な感情とは言えぬ。これでは代助の三千代問題は、きっかけは彼女の苦境への同情ではなく、彼一箇の救済であることになるであろうからだ。しかしながら、三千代への思いも既に触れたように、またこの作品の出発点からして(代助の書棚の一番上にある写真帖は三千代の写真(17)であり、また友人平岡は忘れ得ても、「ある事情により」忘れ得ぬのは彼が三千代の亭主であるが故(22)であり、——)三千代は、どうしても代助の感情から離れ得ない存在であったことも事実である。

ただ、上のような反省が生じたのはこれまでの代助のものの考え方、そしてそれによって刻み出された彼の経歴、によって彼自身が自己の内に空虚を抱えていること(真の自然を知らなかったこと)に気付いたことを意味する。そうすると、そこから脱出すればよいのだ、ということはもはや明らかである。ただ、どのように?の詳細が問題として残るであろう。

(三)、自然の掟と人間の掟の区別

代助は、三千代問題および結婚問題を「新しい運命が、自分を攫いに来るのを待つ」(180)ために旅行に出ようと思う。だが、その前に三千代がまた気になり、翌日平岡の家を訪ねる。そこで、結婚祝いに自分が贈った指輪ももう一つの指輪も嵌めていない三千代の指を見、金に換えたことを知る(182)。彼は旅行用に持っていた金を全部三千代に与えた。やがて代助に異変が起きる。読みかけの書物が、前を忘れて読めなくなる(199)。「彼の読んでいるものは、活字の集合として、ある意味を以て、彼の頭に映ずるには違ないが、彼の肉や血に廻る気色は一向に見えなかった」(200)。先に三千代に与えた金は平岡に知らされただろうか、それが気掛かりだということを口実にまた三千代に会いに出かける。今度は下女と張物をしていた彼女は、わざわざ次の間から指輪を持って現れ「いいでしょう、ね」と謝罪するように言っている(203)。代助は三千代を平岡に対して罪ある人にしてしまったと思うが、良心を蝕すには至らなかった。ただ急速に夫婦の関係が悪くなっているのは理解した(204)。彼は、「小供を亡くした三千代を」「夫の愛を失いつつあ

る三千代を」「生活難に苦しみつつある三千代を」気の毒に思ったが、「但し、代助はこの夫婦の間を、正面から永久に引き放そうと試みるほど大胆ではなかった。彼の愛はそう逆上してはいなかった」(205)。

しかし代助と三千代の間は一触即発の危険な処まで来ていた。「自然な情愛から流れる相互の言葉が、無意識のうちに彼らを駆って、準縄の埒を踏み越えさせるのは、今二、三分の裡にあった」(207)。だが、彼らはそういう意味での「自然の命ずるがまま」(同)には、此处ではならなかった³²。ただ代助は「自分と三千代との現在の関係は、この前逢った時、既に発展していたのだと思い出した。否、その前逢った時既に、と思い出した。代助は二人の過去を順次に遡ぼって見て、いずれの断面にも、二人の間に燃る愛の炎を見出さない事はなかった。必竟は、三千代が平岡に嫁ぐ前、既に自分に嫁いでいたのも同じ事だと考え詰めた時、彼は堪えがたき重いものを、胸の中に投げ込まれた」(207-8)。

こうして代助は一方では「自分を三千代から永く振り放そうとする試み」(214)をしながら、三千代と逢うと引かれ、平岡と逢うと三千代を彼に委ねて置けない(218)という「論理の許さぬ矛盾」(同)を犯していた。矛盾・ジレンマは尚続く。平岡に当たりながら、自分が三千代のために全力を挙げ得ないのは、昔の人が「利己本位」の立場に居ながら自分は固く人のためと信じて泣いたり激したりして結局は相手を自分の思い通りにしたのは、現代の人間である自分にとって「無分別なる幼稚な頭脳の所有者か、しからざれば、熱誠を銜って、己を高くする山師」(218-9)に見えるからである。彼はそう信じていたが、すると彼は三千代問題も一なる現代人として傍観するほかない。しかし他方で、自分と三千代の関係は、「直線的に自然の命ずる通り発展させるか、またはその反対に出でて、何も知らぬ昔に返るか」(219)のどちらかにしなければ「生活の意義を失ったものに等しいと考えた」(同)。こうして、彼は更に、三千代と自分の関係を、「天意によって」発酵させるか、三千代と永遠に隔離するかのいずれかを採らざるを得なくなる。天意に従う場合には、「天意に叶うが、人の掟に背く恋は、その恋の主の死によって、始めて社会から認められるのが常であった」し、「永遠の隔離」の場合には「自己の意志に殉ずる人にならねば済まなかった」(219)。

要するに、「自然の児になろうか、また意志の人になろうかと代助は迷った」(220)のであるが、ここで注目しておくべきことは、漱石に依れば、代助の「天意に従うこと＝自然の児になる」は「人の掟に従うこと」、「意志に従うこと」に反することになる、という図式があることである。「天意＝神意＝自然」に従うことと「人の掟」に従うことの対比および前者の優位を明示するのはソポクレスの『アンティゴネー』以来の純正な「文学」の主張である。その「神意に従うこと」が「意志に背くこと」であるとするには、「せせこましい人間理性の埒内での意志の決定」といった付加的な記述を加えなければ旨く行かないであろう。漱石のいわゆる「則天去私」とは、当に「天に則してせせこましい自己本位を脱ぎ捨てること」でなければならなかった。「自己本位」そのものを非とする訳には行かないのである。「賽を投げる」の比喻も、いささか手を入れる必要があるであろう³³。作者の言わんとするのは、「賽を投げる以上は、投げた後は天の法則通りになるよりほかにしかたはなかった。賽を手を持つ以上は、また賽が投げられるべく作られたる以上は、賽の目を決めるものは自分ではなく天意であるとしても、全体が自らの意志以外に

あろうはずはなかった。代助は今賽を投げるのは自分であると、腹の裡で決めた」ということであろう。

代助は「不決断の自己嫌悪」(221)に陥るが、「やむをえないから、三千代と自分の関係を発展させる手段として、佐川の縁談を断ろうかとまで考えて、覚えず驚いた。しかし三千代と自分の関係を絶つ手段として、結婚を許諾して見ようかという気は、ぐるぐる回転しているうちに一度も出て来なかった」(221-2)。「一番しまいに、結婚は道德の形式において、自分と三千代を遮断するが、道德の内容において、何らの影響を二人の上に及ぼしそうもないという考が、だんだん代助の脳裏に勢力を得てきた」(222)。これは、既に平岡の妻である三千代に対して「(世間の) 道德」は「形式的には自分との間を遮断するが、内容的には何も影響を及ぼさないのだから、自分が他の女と結婚したとしても三千代との関係は続かない訳にはゆかない、結婚すればただ新しい形式を増やし苦痛を増すばかりだ、ということである。苦痛が増すのを阻止するためには「縁談を断るほかに道はなくなった」(同)。

このようにして、結局は「自然の児」になり、「自然の昔に帰る」(238、これは219の「何も知らぬ昔」とはまるで違う。)という選び方しか残らない。

(四)、結末

父親の持ってきた縁談を断ることに決めた翌日、代助は「今日からいよいよ積極的生活に入るのだと思った」(223)。これは決して、ひとの解するように「人妻三千代への突進を開始する」^{③④}などということではない。言うならば代助は三千代と「並んで」人間存在の根源である自然の促しに従って生きようとするのであり、そういう促しに乗ることこそ「積極的生活」の謂いなのである。次に当の道行きの相手である三千代に逢う。「僕の存在には貴方が必要だ。どうしても必要だ」(244)と訴える。彼女もこのことあることは予想していたようである。「三、四年前に、貴方にそう打ち明けなければならなかったのです」(245)と言う代助に、「打ち明けて下さらなくてもいいから、何故、——何故棄ててしまったんです」(246)と応え、泣く。

また、「——その上僕はこんな残酷な事を打ち明ければ、もう生きている事が出来なくなった。——」(247)と言う代助に、三千代は、「私だって、貴方がそういって下さらなければ、生きていられなくなったかも知れませんわ」(248)と応えている。「彼らは愛の刑と愛の寶とを同時に享けて、同時に双方を切実に味わった」(249)のである。ここに代助は三千代を送って出た後に、「腹の中で『万事終わる』と宣告した」(249-50)と書かれている。これを、代助の安楽な生活がここで終わって、不徳義の代償として惨めな生活に入るのだ、と解す向きもあるが、それは間違いであろう。『それから』ではあるが、この〈終わり〉には「それから」はない^{③⑤}。ここでは、あの十字架上でのイエスの「全てが終わった」(cf. ヨハネ 19.28)が前提になっており、天道の完成を表現している、と読むべきなのである。たしかに代助は「意志の事柄」を引っ込めて「天意に従う」のではあるが、天意に従う「意志」が、このようにして完成するのである。

三千代が片づく、残るは父と平岡であるが、父親はこのような決断をした代助に、「じゃ何でもお前の勝手にするさ」と言い、「己の方でも、もうお前の世話はせんから」と言い渡すものの、なお親子の間の事は予断を許さないところがあるであろう。ただ、平

岡は三千代を譲ることに同意はするものの、「男の面子」からすんなりとは渡さない。三千代は病気になってしまったのだが、その病人を生きたままでは渡さないと言い（289）、また絶交した以上は代助が平岡の家を訪ねることを固く謝絶する（290）のである。

むすび

以上、読んできたように、『それから』で漱石は後の「則天去私」という言葉に丁度該当する「天意に従う」ないし「自然に従う」という選択方式を示すことによって、一見「不徳義漢」として葬られるのが相応しい主人公代助を、逆に人間の生の形式の完成者として指し示すという冒険を敢行しているのである。この作品全体において表現する最重要事態こそ、漱石が「予告」³⁶において「妙な運命」と言い表した事柄に他ならなかった、と思われる。これこそ、J. オースティンの『エマ』において主人公が救済を得ている「論理」であった、と言えるであろう。

ここから翻って見ると、いろいろな観点から、漱石の『それから』がその中心テーマにおいて『エマ』と酷似していることが明らかになる。もはや、これを本格的に論じるには稿を新たにしないが、要点だけを述べれば次の諸点である。①主人公が、経済的に余裕があることから、ボンヤリして「肝心のこと」を見落としていること（虚無思想）、②そのために、また主人公が親しい男女を仲介すること、しようとする事、③その一方の極めて親しい異性が自分にとって不可欠な人物であることに運命的な仕方であつて、④主人公はそこから一見「不徳義漢の振る舞い」をされると思われ、⑤不徳義漢の誹りを克服する論理が示されること（虚無思想を乗り越えること）。それは言い換えると漱石『それから』の着想が『エマ』から得られたものであるという想定が可能であるということである。だがそれを論じるにも、本稿は既に予定の紙数を余りにオーバーしている。他日を期したい。

註

- ① こういう紹介は漱石の孫娘という松岡陽子氏の『孫娘から見た漱石』を以て打ち止めとしていいであろう。マゴマゴしていると文学論まで進めないうちに人生を終わらねばならない。
- ② 筆者には文学とは無縁の江藤淳氏の活躍がこの傾向を作るのに与って力があつたものと思われる。
- ③ 『「プライドと偏見」の人間観』（「大分県立芸術文化短期大学紀要」平成15年、41巻所収）。
- ④ 中央公論社、226頁。以下の数字も同書。
- ⑤ 鳳書房刊。
- ⑥ 共に上掲工藤政司氏『エマ』（岩波文庫）解説。
- ⑦ オースティン・リー『ジェーン・オースティンの思い出』に拠るとされ、ほとんどの解説者が引用しているものである。
- ⑧ 以下、引用はThe Oxford Illustrated *EMMA*に拠る。ただし、章分けは今日ほとんどの

版で行われている通しの55章分けを採用した。

- ⑨ポール・ポラウスキー『ジェイン・オースティン事典』（鷹書房弓プレス、向井秀忠訳）P.178でのファーラーの言い分みよ。
- ⑩彼については、或る点までは罪責感の指摘が行われていることを認めねばならないが、それが本稿で論じるとき主題理解にはつながらない。
- ⑪映画などでは表せない事柄である。Fiona Shawの朗読で、この繰り返しを省略しているPENGUIN AUDIOBOOKS EMMAなどは、制作者の見識が疑われる。もっとも、インターネットで見られる多くのシュノプシスが道徳性の問題を解していないのであるから、それと同類のことではあるだろう。
- ⑫実は41章にはそのような記述はあるもののエマにはその事実はない。作家の勘違いであろうか。勘違いとすれば、別の意味が出てくる。
- ⑬アリストテレス『詩学』1148 a。
- ⑭ここにどぶ板を踏み外すのを人間らしいと呼んで安心する読者たちのために書かれているのではないが、また決して「自信に満ちた道徳観を大胆に描いている」（第一節冒頭、工藤氏のコメント）とは言えない、〈不徳義〉の立派な証拠がある。
- ⑮神の存在が語られているとして、それで何だというのか、と問う向きもあろう。だが、摂理が語られているのだ。エマのみならず人間誰でも運命を支配する〈最重要の力〉が働いており、そのことにエマは何らかの感触を得ても当然であると作家は述べているのだ。この誰もが従わねば正しく生きることにならない力に正しく対応するということがエマの問題になっているのだ。
- ⑯「創世記」2.18および2.24。
- ⑰第二節註⑫の箇所みよ。
- ⑱後述『それから』の代助の「道義欲」という不自然。
- ⑲松岡陽子前掲書「漱石とジェーン・オースティン」とりわけ127-132頁参照。
- ⑳漱石がオースティンが無教育の文士と呼ぶ（松岡同書129-30）のは意味深長であろう。「無教育な文士と教育ある文士」で、オースティン、ディケンズをG. エリオット、メレディスと対比しているところでは、「概念化」というのが問題になっていると思われる。『エマ』を概念化したのが『それから』である、と言えるだろう。
- ㉑テキストは同じくThe Oxford Illustrated版より。次の『説得』に関しても同じ。
- ㉒筆者の別の論文（インターネット論文）で十分に述べているので、ここでは省略する。
- ㉓前掲、拙稿「『プライドと偏見』の人間観」。
- ㉔英国文学の長い歴史においては、聖書の世界をそう呼ぶことは可能であろう。そこで、以下の例をどう見るか、旧約聖書をどう読むか、という問題なのだが、私は機械仕掛けの神が登場させられたり自然を無茶苦茶に越えた神秘を語る必要はないと思っている。ダビデは自然の欲求を越えて臣下の妻に道ならぬ恋慕をし、臣下を没義道に殺してしまう。それはどうして生じたのかと言えば、ダビデがその時期に「生命の芯」であるものを忘却していたからであると言わねばならない。ひとが自分の「生命の芯」たるものを忘失する時、彼は度を超えて（自然の促す欲求を越えて）欲望を遂げようとする。そうすることによって（虚しく）満たされようとするのである。ダビデはそうした。それ

がじつはひとが「罪に陥る」ということなのである。それ（罪）を告白したとき、彼は赦された。これは言い換えるならば彼は罪を犯したが、その後「生命の芯」であるものを思い出し、生を回復したのである。それを赦しというのだ。このような論理が、それでは『エマ』や『それから』に通用するだろうか。する、というのが筆者の見る所である。エマは、自分のハリエットへの関わりが「耐え難い虚栄心insufferable vanityによって」（412-13）だったと自覚しており、これまでの「すべてに間違っていたことが証明された」（413）のであった。虚栄心はまさに神を亡失している状態で生起することがらである。また、エマは先に「隠し球」としての「第一原因」に言及しており、ここでそれに気付いたならば、彼女にとっての罪は（表面的な・対人間的な道義とは比べものにならない仕方）で消失するのである。『それから』の代助が自然に背を向けて、道義欲から友人にいいところを見せようとして三千代を手放したしっぺい返しを受けて苦しみ、「自然に即して生きることによって甦る」と丁度ピタリと符合しているのである。こういう筋でオースティンと漱石はつながるのだ。

②⑤筆者は平成16年から「西洋思想史」の講義を担当し、その際『プライドと偏見』をテキストとして使用し、「自己本位」「則天去私」をもその解説語として使用してきた。その際筆者の頭には漱石の学習院講演「私の個人主義」だけでなく、『それから』があった。

②⑥江藤淳『決定版夏目漱石』（新潮文庫）14頁。ここで江藤氏は松岡譲氏の「宗教問答」、「『明暗』の頃」という二つの文書を出典としている。そしてさらに、「最も興味をひくのは、漱石が「則天去私」的な作品として、ジェイン・オースティンの「高慢と偏見」、ゴールドスミスの「ウェイクフィールドの牧師」をあげている事実であって、こうなると、「則天去私」という言葉で漱石が何をいおうとしていたかは、かなりあいまいになって来る」と述べている。おかしい主張である。漱石がこの二人の、しかも作品名まで挙げているのであれば、それを辿ってみれば如何なる原作の主張を承けているのかは歴然として来ると、江藤氏は思わないらしいのである。ついでながら述べておくと、漱石は則天去私の思想の着想点としてゴールドスミス『ウェイクフィールドの牧師』を挙げているのだが、その思想が最初に展開されるのが『それから』であるのと、ゴールドスミスの名が『エマ』に2度登場し、その一度目は作品『ウェイクフィールドの牧師』も挙げられているのは、単なる偶然ではないであろう。残念ながら筆者はまだこの作品を読めないでいる。

②⑦松岡前掲113頁。東北大学付属図書館『漱石文庫目録』（1971）に拠るものと思われる。

②⑧このような『それから』解釈は、今日ではもう見られなくなってしまっているのかもしれないが、筆者はこういう見解を三十年前に読んだ滝沢克己『夏目漱石』（法蔵館刊『滝沢克己著作集3』所収）に大卒として負っている。

②⑨以下の引用は、2006年版岩波文庫による。

③⑩そういうものがあるとすれば、代助にはすでに自分の方が回る中心を認めていることになりそうだが、ここではそうではないのである。飽くまでも自分がその時々を感じる欲求を中心に据えて、それを満たそうとするのである。平岡に三千代を斡旋した際の代助の心情はその程度のものであったのだ。

③①アンニユイは、代助の考えでは、彼に行為の中途において「何のために？」という冠覆顛倒の疑いを起こさせるものに他ならなかった（157）。

③②彼らの関係をそのようなものと捉える解釈者の何と多いことか。角川書店刊、三好行雄編『鑑賞日本現代文学・夏目漱石』所収の梶木剛氏「『それから』の主題」に紹介される高橋和己をはじめとした多くの論者は論外としても、「岩波現代文庫」『宗教』309頁の上田閑照氏ですら、そうである。だが、たしかに〈危機〉はあったが、二人の関係はそうはならなかったのだ。

この作品には少なくとも「自然に従う」という言葉に二つの意味があるのを区別しなければならない。一つは、人のいかに生きるべきかを規定する法則に、人間の作った便宜的キマリと、その正邪すら裁く高次元の規定があり、この後者に従うことである（p.197など）。つまり、「自然」は、「造られたものの持つ自ずからなる傾向性」というようなものよりも、もとラテン語の*natura*ないしギリシア語の*physis*の持つ「作り行くところのもの＝神」という側面を持つものであって、この作品で大事なのはその意味なのである。そうでなければ「自然に従う」を「天意に従う」と同一視することは出来ないであろう。第二に、「（三千代との関係を）自然の命じるように発展させる」（219）という句の中にあるもの。ここには、三千代への憐れみから彼女を救わんとする情動もあるのだが、「恋」というものが中心に火柱のように立っている関係を天意に従わせると言う限り、「自然、動物として生きる」というニュアンスも生きていと言わねばなるまい。ただし、反論もあるべし。恋という情動は、動物的なものではなく、まさに人間的なものである、という。

③③なぜこのようなことが出来るか？ 漱石には、天意に従うか、それとも人間の理性的意志の事柄である倫理に従うかの二者択一が先にあり、その詰めは少しばかり甘かった、という他ないのではないだろうか？

③④前掲『鑑賞日本現代文学・夏目漱石』所収、梶木剛「『それから』の主題」391頁。

③⑤『門』がそうだと言う者があるが、『門』は明らかに〈姦通者〉の「それから」であって、『それから』の代助・三千代の「それから」ではないのである。江藤淳氏は、漱石が「この主人公は最後に、妙な運命に陥る。それからさき何うなるかは書いていない。此意味に於ても亦それからである」と書いているのを、「『予告』にいわゆる、代助が最後に「陥」るべき「妙な運命」とは、「姦通」であった」（『漱石とその時代』第四部263頁）と言うが、そしてまたこの作品をそのように位置づける者は極めて多いのだが、それはまちがいである。「マタイ福音書」5.27～30のイエスによるこれ程の厳しさは他に例がない規定に照らしても、代助に〈姦通〉という語は適用することはできない。

③⑥岩波書店刊『漱石全集』十六卷二八五頁

09・11・25